



TITLE:

國文學論叢総目録 自創刊号至第十五号

AUTHOR(S):

CITATION:

國文學論叢総目録 自創刊号至第十五号. 京都大学國文學論叢 2006, 16: 57-60

ISSUE DATE:

2006-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137349>

RIGHT:

國文學論叢總目錄

自創刊号至第十五号

卷 頁

創刊の辞

日野 龍夫 ①

◇

『萬葉集』五十九番「流らふるつま吹く風の寒き夜

に我が背の君はひとりか寝らむ」考

河上志貴子 ⑥三五

『萬葉集』の春の花と聞怨詩——卷十「詠花」歌一

首の本文批評をめぐって—— 河上志貴子 ⑩一

奈伎志曾母波由の訓詁

薦 清行 ⑭一

◇

西本願寺本系業平集と東山御文庫本業平朝臣集

鈴木 隆司 ①五二

『竹取物語』、「竹公主」から「斑竹姑娘」へ

宋 成徳 ⑫七二

大君から浮舟への転換——浮舟の「形代性」と「反形

代性」—— 辛 有美 ②三四

和泉式部日記「故宮の御はてまでは」考——応永本

本文の可能性—— 菅原 領子 ③一三

『和泉式部日記』の語り手の様相 菅原 領子 ⑨一七

『和泉式部日記』『夜の寢覚』の「道芝」

菅原 領子 ⑩一八

『和泉式部日記』の孤絶感——「人はことに目もと

ゞめぬを」考—— 菅原 領子 ⑫一

目に見ぬ花

道をうづむ花 大谷 雅夫 ④四四

大谷 雅夫 ⑥二三



「風の声」の表現——和歌における「おと」「こゑ」

試論—— 小山 順子 ⑥六五

藤原良経「二夜百首」考——速詠百首歌から見る慈

円との交流—— 小山 順子 ⑬三七

伊勢物語と伊勢物語歌の理解——新古今集・新勅撰

集における作者の問題—— 鈴木 隆司 ⑤七三

「力あり」ということ『光厳院三十六番歌合』判

詞をめぐって 阿尾あすか ⑮一

禁詞考 長谷川千尋 ⑥八三

兼載「三句め」の技法 長谷川千尋 ⑬一七

『我身にたどる姫君』巻六の位置付け 金光 桂子 ②一

室町時代物語『仏鬼軍』について——新出本の紹介

を兼ねて—— 本井 牧子 ⑤一

『預修十王経』の諸本 本井 牧子 ⑪一

お伽草子における説話引用態度——志賀寺上人譚を

通して—— 柴田 芳成 ④一

南円堂鎮壇をめぐる説話 橋本 正俊 ⑨一

誤伝の背景——『沙石集』の和歌説話から——

能《正儀世守》の造型と作者——物狂能構造の応用
例—— 橋本 正俊 ⑫一八

『石井三家系図』の成立——連歌師石井家と東九条
中嶋 謙昌 ⑦三九

莊下司職石井氏—— 中嶋 謙昌 ⑫三四

狂言「歌仙」考——その着想と特殊性をめぐる

—— 川島 朋子 ④二四

〈七騎落〉間狂言試論——（俊寛）との影響関係の

可能性—— 川島 朋子 ⑦五六



近松浄瑠璃における「狂乱」の意義——『双生隅田川』

を例に—— Kaewri thidej Ladda ①一六

近松時代浄瑠璃に描かれる「悪」 久堀 裕朗 ③二六

浄瑠璃の当代性と仏教 久堀 裕朗 ⑧一

『国性爺合戦』における「変化」と「統一」の方法

をめぐる 朴 麗玉 ⑧二二

『浅間嶽面影草紙』論——京伝読本との関係から

—— 本多 朱里 ⑤五三

『開卷一笑』小考 川上 陽介 ②一五

『照世盃』の施訓者について 川上 陽介 ⑪二三

『四鳴蟬』の作詞法について——『玉簪記』との関

係——川上 陽介 ⑬ 一

『妬婦伝』小考 川上 陽介 ⑮ 二三

梁田蛻巖の「九日」詩 中島 貴奈 ⑤ 二〇

頼山陽「耶馬溪図巻」考——その題画記をめぐって

鷲原具仁子 ④ 六一

米沢彦八とそろま 林 泰弘 ⑧ 五三

賀茂季鷹の能宣歌誤写説——文化十年石清水臨時祭

再興逸事——盛田 帝子 ⑨ 二九

宣長の落ちた陥穽 日野 龍夫 ① 六八

峻厳な恋と哀切な恋——秋成と宣長——日野 龍夫 ④ 八八

漢詩と俳句 日野 龍夫 ⑦ 一



航西の東道主人——成島柳北「航西日乗」とそれ以

前の海外紀行文——マシュー・フレリー ⑧ 六四

牛鬼蛇神の詩——宮崎晴瀾とその周辺——福井 辰彦 ⑤ 三六

改作のあとさき——『下谷のはなし』から『下谷叢

話』へ——福井 辰彦 ⑪ 三九

大正前期の歴史小説・史劇論——〈新解釈〉と〈歴

史性〉をめぐる文壇的背景と芥川——

「愛すればこそ」の構造 奥野久美子 ⑦ 一七

「冥途」及び「道連」における声 田鎖 数馬 ⑮ 三九

「作文管見」の背景 永井 太郎 ① 一

郁達夫の主人公の設定——日本文学との共通点——永井 太郎 ② 五〇

「聖家族」の方法——現実・虚構・幻影——申 英蘭 ⑪ 五四

伊藤整『生物祭』攷——ある屈折——飯島 洋 ⑩ 二八

堀辰雄「ほととぎす」攷——「菜穂子」への序奏——飯島 洋 ⑫ 五七

飯島 洋 ⑭ 一七



上代 去るということ 大秦 一浩 ① 四二

上代形容詞連用形の一側面——萬葉集においてミ語

法との関係から——大秦 一浩 ⑥ 一

写本『日葡辞書』における「*に*」の使用

岸本 恵実 ① 1

キリシタン史料の拗音および連母音を表す ¹² をめ ぐって	岸本 恵実	②	1
キリシタン版国字本における本語の開合表記	岸本 恵実	③	1
「バレット写本」の成立とその周辺——飾り模様を手 がかりとして——	川口 敦子	⑥	二一
『サントスの御作業』の稿本——バレット写本の注記 より——	川口 敦子	⑦	1
朗読集 (Lectioarium) としてのバレット写本所収文 書	川口 敦子	⑨	三七
「講義要綱」におけるローマ字書きの本語について	POPESCU Florin	⑨	1
「講義要綱」における仮名本語と原語の綴りとの関 係について	POPESCU Florin	⑩	1
「講義要綱」における仮名本語と原語の綴りとの関 係について (2)	POPESCU Florin	⑪	1

「講義要綱」における合字本語について	POPESCU Florin	⑫	1
「講義要綱」における漢字表記の本語について	POPESCU Florin	⑭	1
『捷解新語』の語彙改訂の方向性——語種改訂を中 心に——	朴 真完	⑩	17
◇			
京都大学文学部国語学国文学研究室蔵『まぼろし草』 ——紹介と翻刻——	小山 順子	⑩	四四
お伽草子『緑弥生』——新出作品解説——	柴田 芳成	③	一
『精進魚類物語』作者に関する一資料	柴田 芳成	⑩	五二